



史談会開催日

昭和 53 年 (1978 年) 2 月 2 日

『印刷界 60 年の潮流に生きて』

(1) オフセットとの出会い

■ 語る人

谷本 正 氏

(開成印刷株式会社代表取締役専務)

■ 【谷本正氏の略歴】・

・明治 33 年 11 月、大阪で生れ、大正 9 年 3 月、大阪の成器商業学校を卒業し (後に阪大商科を修了)、直ちにオフセット印刷の開拓者である市田幸四郎氏の経営する市田オフセット印刷株式会社に入社、工務課に勤務、その後軍隊に入営、大正 11 年 3 月除隊して再び同社に復帰し、作業課長として、関東大震災の復興印刷物製作に活躍。大正 13 年 6 月、上海分工場の工場長として 3 年半勤務し、昭和 2 年 11 月再び大阪本社に戻り営業部主任として活躍した。その間、合併して精版印刷株式会社となり、市田時代より引続き 10 年間勤務したが、円満退社した。昭和 4 年 4 月、東京の芝にあった愛宕印刷株式会社より招聘され支配人に就任、その後専務取締役として昭和初期の最も不況な時代と、第二次世界大戦中に奮闘された。19 年に企業整備によって、川口印刷所や亜細亜商会 (現亜細亜証券印刷) など 7～8 社と合併して帝国印刷株式会社 (現在の図書印刷) を創立、取締役工場長となる。戦後の 20 年 12 月、小林川流堂の復興に協力、取締役営業部長となり、灰燼の中より会社の再建整備に取組み、現在の開成印刷株式会社を創立、代表取締役専務として現在に至る。一方業界にあっては、戦後いち早く東京都印刷工業協同組合の理事となり、30 年の東京都印刷工業調整組合時代は常務理事、弘報委員長を務め、さらに工業組合に移行して副理事長及び全印工連の常務理事として活躍、現在は東印工組相談役。印刷関係以外でもキリスト教関係、ロータリークラブなどの要職に就き活躍中である。なお、米国テキサス州・ダラス市の名誉市民の称号を受け、さらに昭和 50 年には野間賞を受賞した。

はじめに

私は 1900 年 (明治 33 年) 生れの 77 才と 3 カ月で、20 才で印刷界に入り今日まで 58 年間、印刷一筋に生きてきましたが、この変遷きわまりない中でいろんな場面にぶつかり、しかも上海の印刷工場に行くとか、第一次欧州大戦のパニックとか、関東大震災の影響、昭和初期の大不況、それに大東亜戦争の動乱、さらに戦後の荒廃した国土の中から今の会社を復興するなど身を以て体験したことを語るとしたら、とても一時間内では話さきれないと思います。

そこで私が大正 9 年に市田オフセットに入った当時と、その前後の日本の印刷界、特に大阪にいましたので、大阪の状態はどうだったのか、そして市田幸四郎という人がどうしてオフセットに目をつけ、どのようにアメリカから輸入してオフセット工場を始めたか、そしてどのようにして企業化させて発展し、今日のオフセットの繁栄を導くようになったか、ということをお話し申し上げねばなりません。

また、平版のカラー写真製版プロセスに市田は非常な関心を持ち、H・B 写真製版を日本に導入したが、これなどによってオフセットの近代化が完成したとも言えるわけですから、こうしたことを中心に話してみたいと思います。

その当時の経緯については、直接その場において私が見聞きしたことと、入社前のことは私の同僚、先輩から聴取したことを基にして申し上げますが、すでに先輩たちは今日ではほとんど亡くなりました。幸いそれらの諸先輩が生存のうちに私が記録を残すため訪問して、古い時代のお話を教えてもらい、記録として保存しておりますのでかなり正確だと思います。また、15、6 年前に、ある出版社から頼まれて『市田幸四郎の生涯』について 7 回にわたり雑誌に連載し

たことがあります。ともかく古い話なので、人の名前や年代に記憶違いがあるかも知れませんが、予めご了承くださいと思います。

昔から『温故知新』ということばがありまして、古きをたずねて新しきを知るということなんですが、この史談会もそうしたところから発想されたのではないかと思います。ということは、古い人のやったことを古いままで今日やっても、それが通用するわけはありませんし、また、新しい方法で新しい人がそのままおやりになっても失敗することがあるかも知れませんが、やはり古い話を聞いてそれを参考にしてより良いものを作り上げていくということがいいのではないかと思います。その意味で今日の私の話を聞いていただいて、何かご参考になれば幸であります。

市田オフセットへの入社

オフセット印刷がどうして日本に入ってきたかということは興味ある話ですが、それをお話する前に、私が大正9年に市田オフセットに入った時代の前後の様子を申し上げないと、その頃の印刷事情がわからないと思いますので、それから入ってみたいと思います。少し話が前後してお聞き苦しい点はお許し下さい。

東京へ市田が大正の末年に行き、市田オフセットを旗揚げした経緯は、大阪で日本精版との合併談が不調に終わったからです。私の隣におられる佐久間さんが、まだ大日本印刷の社長になられる前、すなわち、秀英舎と日清印刷が合併する前の日清印刷という会社が早稲田にありましたが、市田が昭和2年に東京で再起を行っている最中に、麴町の竹橋で交通事故によって急死され、解散整理をしなければならなくなって、会社をそっくり機械も人間もそのまま日清印刷に買い取ってもらったのです。晩年は全く薄幸の人でした。

前置きが少し長くなりますが、私が市田オフセットに入りました動機は、商業学校時代の先輩で、安達信雄という学校創立以来の秀才がおりまして、私が日頃から尊敬していた人ですが、この人は市田幸四郎が事故死する最後まで側近にいて、市田の死後、日清印刷へ会社を売込んだ立役者です。安達さんは後に大日本印刷の常務取締役となり、関西支社長として活躍中、7、8年前に心不全で急逝されました。

この人は船橋の末吉橋辺にあった小さい石版屋の長男でした。ご本人は学校を出て自分のところが零細企業ですから、近代的な市田オフセットに入り、新しい技術を憶え、いずれは親の仕事の後を継



いで独立しようという考えだったと思うんですが、秀才だったもの
ですから頭角をあらわし、市田幸四郎から非常に重用されたわけで
す。

私は在学中にときどき、この先輩の安達さんをお訪ねするうちに、
この人の推薦で市田オフセットに、安達さんより2年後に会社へ入
れてもらったというわけです。

ご承知のように、その頃は第二次欧州戦争が終わった直後の大正
7年で、4年半続いた戦争に日本も戦争の終わりに青島の戦争に参加
しただけで漁夫の利を得、日本中にはにわか成金が出現した頃で
ありましたが、戦争が終わると先ず山下汽船など船会社や造船所が
潰れるし、その当時の大手商社であり現在の三井物産や三菱商事に
匹敵する神戸の鈴木商店が焼打ちされて倒産するなど、物騒な時代
でした。戦後のインフレ、デフレによって、日本の経済界は大混乱、
民間では富山の女房達が「米よこせ」騒動を起こすなど、日本国中
が騒然たる状態でした。

したがって就職ということも、今日と同じように狭き門でなか
なか大変な時でした。こうした時、安達君から話を聞いておりますと
いろんな印刷があるけれど、オフセット印刷は将来性があるって非常
に有望であり、しかも経営者の市田幸四郎という人が非常に頭がよく
て、先見性があり、進取の気性に富んでいて、この人の薫陶を受
けたら将来のためになると聞かされ、月謝を払って高等商業学校に
行くよりうんとためになると親切に市田オフセットに入ることを奨
めてくれました。

当時は商業学校を出て月給は27、8円ぐらいで、帝大を出て初
任給は60円という相場でしたが、学校を出てもやはり3分の2ぐ
らいしか就職出来ず、3分の1ぐらいは浪人でした。私はそうした
有望な会社に入れてもらい、月給は破格の45円をもらいましたが、
みな先輩のお蔭です。

(2) 明治末～大正初めの印刷界アルミ直版が活躍

市田オフセットの業績

市田オフセットは、梅田の駅から少し離れた桜橋から、神戸のほ
うへ向かって阪神電車の踏切のある出入橋という所がありました。
踏切の角に元森川印刷所という石版・アルミの印刷工場があった跡

を、市田さんが見つめてきて買いとったんです。木造平家の5百坪ぐらいの工場でした。

その前の市田は、横堀で営業所だけ持つブローカー的存在の市田合名会社を経営していて、資本金も50万円の小さい会社をやっていました。後で申すように飛躍的に発展し、出入橋へ進出してオフセット印刷を本格的に始めたのは、大正4年に建設して翌5年から始め、そして私が9年に入ったということです。

その頃の大阪の印刷界はどういう状態であったかということ、今は一般景気の好・不況がすぐ印刷界にも響いてきますけど、当時は半年ぐらいのズレがあったと思うんです。私が入った時は150円ぐらいの資本金でしたが、配当はちゃんと1割5分ぐらいしてまして、業績は上がっていました。他が不況で困っているときに、非常に業績の良かった原因は始めはよくわからなかったんですが、入ってみると、一般の印刷物の他に専売局の煙草の敷島とか、ゴールデンバットとか朝日といった包装物を刷っていましたし、また、中国の煙草のレットルを大量に刷ってまして、赤ベタや青ベタに金文字の入る難しい仕事でした。

大阪は商業都市ですから、ポスターとかカレンダー、お酒やビールのレットルといった商業印刷が非常に多いんですが、結局そうしたもののだけでは不況になると需要量に影響して、梅田の工場ですら大型オフセット印刷機が10数台ありましたから、とても商業印刷だけでは足りなかったので、内地が駄目なら海外からと中国の煙草のレットルなども注文をとっていたわけです。それで良好な業績を続け、たちまち関西で1、2を争う印刷会社になりました。

石版の全盛時代過ぎる

ご承知のようにオフセットが日本に入ったのは大正3年で、このことは紛れもない事実なんですが、それまでの印刷界の状況を、私が入社する前の明治の末年から大正初めの頃まで遡って申しあげますと、大阪及び全国の印刷界は、石版が明治初年から入っておりまして、明治3、40年代は石版印刷の技術も高度に発達し、大阪でいえば、中田印刷（中田熊次氏が社長）というような大手は石版で早くから立派なものを刷っておられました。

その石版石というのは、ご承知のようにドイツの川底から出てくる大きな水成岩のことで全部輸入品でして、持ち運びも重いし、A全判の石なんて1人で持てないから2人で運ぶんです。刷った後、版を落とすのは金剛砂で磨くんですが、冬の寒い時など水でやって



いる人は大変冷たくて往生していました。私が入った時でも石版はまだありまして、取扱いをつぶさに見ておりました。

明治も40年頃になりますと、石版全盛時代がすでに過ぎまして、アルミ版直刷機の活躍期に入っていました。石版がヨーロッパで発明されてまもなく、いわゆるジंक板とかアルミ板の金属板が石版石に砂目立てたものと同じ性能で科学作用を起こして、原版が出来るということはわかっていたわけです。しかし、ジंक板やアルミ板が実用され、大型印刷機が入るようになったのはかなり後で、日本でいえば明治の末期頃ぐらいからで、やはりアメリカあたりから輸入されたわけです。

結局、明治40年頃から大正にかけて、一番の全盛はアルミの直版で四六判や倍判が活躍していたんです。つまりアルミ直版機はオフセットより胴が一つ少なく、紙を巻きつける胴とアルミの版胴だけです。版は逆に作ってあるわけです。そして紙巻胴に薄いブランケットが貼ってあり、けっこうきれいな印刷が出来ました。石版印刷が進化して出来た大型印刷機でした。これがオフセットの発明される動機だったわけですが、みなさんも文献でお読みになったことがあると思います。

アルミ機の手差してB全、倍版もこなしていました。ですからオフセットが発明されたという話をアメリカから持ち込んで来たときでも、日本の印刷界はそれほど反応を示さなかったと言うのは、それなりの理由があり、石版より進化した便利なアルミ版が重用されているのに、慌てて海のものとも山のものとも知れぬオフセット機には飛びつく気分になれなかったようです。それはアメリカでも日本と同じ風潮だったんです。

(3) 市田氏、写真業から印刷業へ近代商法で販路拡大

オフセット開発の動き

日本でもオフセットを開発する現象が起こったのではないかといいことにはなりますが、アルミの胴仕立てで紙差し工が誤って紙を差し損なって版が紙胴の裏のブランケットにくっついてしまって、そこを紙が通ってしまったということはなかったか、と古い職人に聞いたことがあります。確かに逆に刷れているのを紙差し工が捨てるのを技師が見て、大変綺麗に刷れていることを発見したのが、オフセット印刷発明のキッカケで、アメリカ人の頭脳の働きが日本人と



少し違っていたのです。二つ胴にもう一つブランケット胴を張った1本胴を増やし、オフセットすれば印刷が鮮明でインキも最も節約出来、キレイなものが刷れるなら、と発明の動機になったそうです。この技師はルーベルという人で、明治40年のことです。

そして、これは文献で勉強したんですが、明治41年にオフセットを日本に紹介した人があるんです。これは日本に観光に来たシュミットという人ですが、今の大日本印刷(当時の秀英舎)を訪問して、幹部の方に、「アメリカではオフセットという新しいタイプの印刷機が発明され、実用期に入っている」と言って、印刷見本や参考書を持参して見せたそうです。「たいしたもんだ」と言うぐらいで終わってしまったわけです。

その頃、日本でもオフセットの機械を作ろうという動きはあったんです。浜田初次郎(浜田精機の創始者)という人が、中村鉄工所(活版の輪転機など作っていた)の女婿ですが、そこの職長をしていたんです。この人は非常に利口な人で、当時一緒にいた人から話を聞きますと、ポケットから50銭玉を3つ取り出して机の上に並べ、アルミ版胴の他にもう一つ胴をつけてオフセットを作るということを言っていたそうです。風の便りにアメリカでそういうものが出来たということを知っていて、オフセットでもこしらえてみようという気持ちがあったのだと思います。

大正3年3月下旬には、浜田さんでも試作品を作ったというんですが、これははっきり判りません。また、その頃上野公園で大正博覧会が開かれ、日清印刷が石版印刷で刷ったものと一緒に出品したと言います。これはいわゆる石版オフセットで刷ったものを出したんです。石版オフセットとは、芝の真島鉄工所で石版の上にもう一つブランケットを貼った胴を走らせて、今のちょうど校正機みたいなものですが、ミニオフセットを作ったわけです。これで結構綺麗なものが刷れました。

私が市田オフセットに入ったときは、この機械がたくさんありまして、石版では地図とかレッテルが鮮明に出ますので、このミニオフセットでお酒の“白鶴”などのレッテルを刷っていましたし、乗車券・株券・債券など刷っていました。今日でも石版オフセットは健在で関西では活用しています。

本格的なオフセットというのは、浜田さんが考えたり、真島鉄工所で試作をやったりしていましたが、アルミ直版に代る印刷機械はオフセットだと、当時は誰も考えていなかったようです。アメリカ



ではルーベルという人が発明して、アメリカの業界に発表したんですが、あまり反応がなかったんです。そこでまず、大西洋を渡ってイギリスに行ったんです。イギリスはオフセット印刷機というものに非常に注目していました。またそれから、石版印刷及び活版印刷のメッカであるドイツでもこれを高く評価しました。それをアメリカで逆にヨーロッパで歓迎されていると聞いてオフセットを見直したということから、本格的にポッターだとかハリスという印刷機メーカーが作り始めたわけです。

市田幸四郎氏の生い立ち

ここで市田幸四郎氏がどうしてオフセットを知ったかという話になりますが、その前に市田幸四郎という人はどんな人であったかを少しご紹介申し上げねばなりません。

神戸市に日本で1、2という名高い市田写真館というのがありまして、代々男子の後継者がなく、3代目に、鐘紡の重役である永見さんの四男の市田幸四郎さんを8才のときに養子に迎えました。この方は非常に体格もよく秀才で、エリートコースの神戸一中、神戸高商へと進学しました。神戸高商は非常にレベルの高い新知識を学生にどんどん教えましたので、市田さんも進取の気性に富んだ人で、特に英語、数学が得意だったものですから、市田氏の考え方ではポトレートの写真屋は非常に保守的であり、お客さんが来るのを待っている商売では駄目と決めこんでいました。自分で進んで開拓して行ける商業のことを常に考えていました。親の商売を継いで最初にコロタイプ印刷を始めました。これなら写真業の拡張ですから神戸近在だけでは駄目だと四国、九州から近畿地方に対して、絵ハガキや画張の注文を取り、最初は下請に出していたんですが、そのうち自分の写真館の敷地内にコロタイプの工場を持ち、ついでに株券の注文まで請負うようになりました。この動機は元町の商店街に「みなさん繁盛されるにはクーポンのような福引をつけなさい」と売込んで、その印刷物を市田で注文を取るといふ具合に販路を拡げたのです。

ところが金券に類する印刷というのは非常に精密を要し、だんだん需要が出てくるに従って市田さんは考えました。そしてその当時の日本一の株券、債券、証券の印刷会社である東京の凸版印刷へ行って、そういう仕事をやっていただくことを申し入れ、その当時の社長である伊藤貴志氏にお会いし、後に当時副支配人であった井上源之丞さんが神戸に来て市田さんの信用とか実際の取引状況など調べて帰り、関西代理店という看板を上げることになったわけです。



そこで市田さんとしても箔がつき、自信も出てきたので、商都・大阪へ進出して、大阪の横堀というところで“市田印刷合名会社”と看板を出し、営業活動を活発に行いました。そして神戸の頃より商域を拡げ、主として石版、コロタイプ印刷の注文を取り下請工場へ流し、証券など高級品はどんどん凸版印刷へ頼み、業績は順調に伸びて行きました。

(4) 市田氏、オフセット機を注文進取の気性に富む

積極的な PR 商法

明治 45 年のことですが、市田さんは英語が達者ですから、高島屋飯田貿易部に自分の同窓の友達で山崎という人がいたので、そこを通していろいろな外国の雑誌や文献を取り寄せて勉強していました。そこで印刷工場を作るならアルミ版よりもっと新式の印刷機はないものかと調べるうちにアメリカでオフセットという最新式の印刷機があることを知り、ハリスオフセット機やポッターのカタログを高島飯田を通して取り寄せたわけです。

とにかく明治の末年から大正初めにかけて日露戦争後の開港地の神戸は非常に繁盛したんです。これに刺激されて、印刷の新しい版式も入ってきたのです。どうして印刷発祥の地が神戸かと聞かれたことがあります。例えば光村原色印刷の原色版も神戸ですし、グラビアのヘリオグラビアもそうですし、オフセットも神戸生れの市田幸四郎がオフセット第 1 号機と、日本で最初に輸入したと言えるんです。そして大阪、東京に拡がってきたわけです。

ひかりは東からという言葉がありますが、印刷は西から来たといっても過言ではなく、神戸がその発祥の地だと自慢して差支えないわけです。これは土地柄がそういう開港地であり、日清戦争で台湾が、また日露戦争で満州へと日本が伸びるに従って商域が広がって神戸、大阪は非常に繁栄したわけです。

そして市田さんの商法は積極的で便箋一つ見ても私が入った時でもそうでしたが、アメリカの便箋のように立派なヘッディングの上質の紙に印刷で、相手を信用させました。そして新しい会社が出来たことを興信録で知りますと、ジャンジャン手紙を出し、あるいは株券の見本を見せて注文しませんかと勧誘するわけです。

例えばこんな話がありますが、これは大阪と神戸の間に地理的に

便利な上に水質が良いというので、アメリカのリバーブラザーズ（現在の日本油脂）が石鹼（シスター石鹼）の工場を作ったんですが、そこのマネージャーが立派な便箋を使っていたものですから相当の印刷企業だと思い込んで大量の印刷物の見積りを出させるわけです。市田さんのその時の出で立ちは、明治45年のことですから、2人引きの人力車で山高帽をかぶり、羽織、袴で靴を履いて行ったというんですから……。何しろ俳優の二枚目のような美男子で英会話は出来るし、スッカリ安心して注文をするんですが、支配人がどんな工場か一度見たいと言い出したので、慌てて下請工場に新しい市田の看板を出したところ支配人もさるもの、今日自分が来るために急に書いたのではないかと怪しまれ、市田さんも兜を脱いだんですが、要するに良い仕事をしてくればそれでいいんだという理解のある話で、リバーブラザーズの仕事を無事にしたという話です。

“注文”と市田家

こうして仕事が広がってきて会社の基礎が固ってくるに従い、念願の自営工場を持ちたくなり、カタログを見ているうちにB全判のポッターのオフセット機を注文したくなったのです。その時（大正2年）の金で5万円なんです。今にしたら1億円ぐらいする機械ではなかったかと思うんです。これは自動でして、当時の自動のフィーダーは今のようエアポンプで吸い上げて風で送る式のものではなくて、ただ金棒で送り出すだけなんです。

とにかく親の財産から5万円引き出して送ったんです。そうすると市田家というのは保守的であり、こちこちのキリスト教信者で市田さんの奥さんの四寿子さんは有名なキリスト教伝道師の金森通倫の娘さんというわけで家では、一切アルコールを飲まさないというぐらい厳しい家系でした。ですから写真館でがっちり地盤があるので新しい事業に興味がなかった。市田幸四郎が時々いろんな買物に大きな金を引っぱり出し湯水のように使い“それ、タイプライターだ、キャッシュレジスターだ”と買うが小物のうちはよいが、5万円もする海のものとも山のものとも判らぬオフセットという印刷機械を買うなんて気狂いじみていて、この先何を言い出すか知れたものではないと、家中に不穏な空気が流れ出したのです。5万円もの大金で機械を買うということで初めて日本に入れるわけですから、それではと家族会議を開き、「幸四郎には困ったものだ、あれに後を継がせては市田は潰れてしまう」と意見が一致して戸籍から外して分家にされてしまうんです。籍をはずして将来借金をしても市田に禍いが来ないようにしてしまったんです。事実上は勘当同然の身になったわけです。



それで市田は金づるが切れて困ったんですが、頭が良いものですから同級生に岸本銀行の頭取の息子さんがいたことを思い出したんです（当時は個人的な名前のついた銀行が随分ありました。後にパニックで潰れて大手の銀行に買収されてしまったんですが……）。岸本が引受けたというので市田さんはそれからの金策を岸本信太郎に頼み、大正2年東京にも進出し神楽坂のお堀端に市田オフセットの看板を出したこともあります。

(5) 日本初のオフセット印刷会社輸入機2台で発足

オフセット機導入

オフセット機を注文して、いよいよ大正3年の夏頃に入るといふメドが立ったので凸版の井上さんとは非常に親交が深まり無二の盟友としていろいろ相談していたわけですからオフセットの話を行いました。井上さんは凸版印刷でもオフセットというのは知っていましたが、やはり保守的な大企業ではおいそれと新しい機械を入れるということは重役会でなかなかパスしないんです。そこで市田さんが入れることを知って、それなら協力しようということだったんです。

ちょうどその頃、新村長次郎さんの奥さんのお父さんである中西虎之助氏が三井物産を通してハリスのオフセット機の半載を注文していることが判り、半年ぐらい早く注文して大正3年春に入ると言っているんです。よく世間の人で“どちらが先に入れた”と面白半分に言う人がありますが、どちらが先だって構わないのです。冒険を冒してオフセット輸入に踏み切ったのはいずれも中小企業者だったんです。日本における2人の先覚者が、印刷界の大恩人なので偉いというようなことはどうでも良いと思うんです。

中西虎之助伝によると、その1年前に上海に行きまして、たまたま英米煙草会社の印刷工場でオフセットを見てから欲しくなったのでありますが、その通りでしょう。私は上海に3年余りいましたので中国の風俗習慣は良く知っているんですが、上海では煙草を作る外国籍の大きな企業がたくさんありまして、大繁栄していました。中国では女、子供でも煙草を喫うわけですからこの煙草のレットルやライスペーパーなど使用量は大変な数に上るんです。その時分に自動オフセット機のB全判、A倍判でレットルを刷っているのを見た中西さんが眼を見張ったのは当然でしょう。そして日本はアルミ直版全盛時代だが将来はこのオフセットが日本で非常に利用さ



れるのではないかと考え、時代の先取りをして、ハリスのオフセット機を注文したそうですが市田と中西の両氏は期せずして同時にオフセット導入に先鞭をうけた美男といえるでしょう。

井上源之丞氏はこの両氏の情報を得て 2人で協同して東京でオフセットを始める工場を世話し、仕事の面で応援することになった。そうしてオフセット印刷合資会社を作り大正3年に鎌倉河岸に工場が出来た。資本金3万円の会社が出来て、市田、中西はそれぞれ1万5千円ずつ出資し、井上は約束通り仕事の面でこれを応援するということになった9月にポッターの四六全判自動機が続いて据付けられ2台で発足し、日本で初めて輸入印刷機による本格的なオフセット印刷会社が発足したんです。

組立てと試運転

ここで興味あるエピソードを一つ紹介致します。「大正3年5月、ハリス機がついたので、組立てを井上源之丞の推薦で当時中村鉄工所の職長だった浜田初次郎に白羽の矢が立った。そして中西も市田も連日作業衣を着てこの組立作業を手伝いました。しかし初めての機種であるから3ヵ月かかった」という記録が残っています。今では新しい機械を輸入するときは外国から技師が付いてきますが、そのときは青写真だけで日本人の手で組立てたわけです。当時の模様を一緒にやった先輩から話を聞いたんですが浜田初次郎はろくに夜も寝ず、床に新聞紙を敷いてゴロリと横になって仮眠するだけだったそうです。なかなか組立てに手間取り試運転までいかないものですから中西虎之助さんは気をもんでノイローゼにかかり原因不明の熱が出て、杏雲堂病院に入院したという逸話が残っています。オフセット機を初めて輸入した当時には、今では想像もつかぬ、そういう犠牲を払ったんですね。このことは新村さんに確かめたら、事実そうだと言っていました。

ポッターの組立てはそれから半年後に荷が着いて、やはり浜田がやったんですが、一度ハリスで経験していますから、今度は1ヵ月で組立てが終わったそうです。ところが組立が完了して向こうから送ってきた荷物がまだ石油箱に一杯残っているんです。どこか部品が抜けているのではないかと心配で、いくども青写真と首っ引きで調べてみてもどこにも落ちがない。“ではどうしよう”ということになったんですが、市田さんは豪放磊落な人ですから“よし”とばかり勇気を出してスイッチを入れたところ、機械は見事に動いたそうです。後でアメリカに問い合わせたところ、残ったのは予備の部品だったんで大笑いしたということです。



そこでその青写真をもとに、ハリス、ポッターを組み立てた経験を生かし、浜田式オフセットを作ったんです。ですから浜田のオフセット印刷機械はポッターという名がついていたんです。

ところが、大正8年、H・B（写真製版）の特許を買うため、市田が浜田初次郎、伊東亮次先生、小島初夫（小島プレス工業）の3人を連れてアメリカへ行ったとき、たまたまポッター社を訪問するんですが、そのときポッター社の社長が出てきて、いきなり“これが浜田か、すぐ帰れ”と、えらい見幕で憤慨するんですね。なぜかというと、自分のところの機械とそっくりのポッター機を日本で浜田が無断で作っていることを知っていたんです。しかし日本で特許を取っていないから特許侵害という訴訟が出来ないから、せめて腹いせに“この野郎”と罵声を浴びせたということです。このとき、浜田さんに奥さんが急逝された電話が入り、すぐ帰国されたんですが、伊東亮次先生はアメリカに暫く残って、H・B製版について研究されてから帰って来られたわけです。とにかく、このポッターとハリスの2台で始めた「オフセット印刷合資会社」は非常に活躍しました。

(6) 「市田オフセット」の名、全国にポスター印刷で脚光

市田氏、独立へ

「オフセット印刷合資会社」が発足して最初の仕事は井上の尽力で、レットルや国定教科書の図画本の色刷りでした。印刷効果は、石版やアルミ直版で見られなかった色調と鮮かさを出し、好評を博しました。特に大正4年、大正天皇のご即位に際し、通信社から御大典の絵はがき、オフセット18色刷り2枚1組のもの1千枚を見事に完成し、一般に売り出されて、その見事さにオフセット印刷が一躍評判になりました。この18色刷りというところに、まだH・Bは入っていない頃ですから、ご注意願いたいと思います。当時ポスターでも高級ものは20何色刷りというのがあったんです。

この絵はがき18色刷りをオフセットで刷ったところが、普通アルミ直版刷りでは朝7時から晩9時までやって手差しですから1万から1万2千通しであったのが、オフセットは1分間130枚という猛烈なスピードだったんです。ですから1日に7万通しということで、新しいオフセットという機械は大したものだと、自然に全国の印刷界に知れ渡り着目されるに至りました。そこで鉄道院の地図を作ったんですが、この地図は精密な色刷でしたが、オフセットが



見事に刷り上げ、技術が抜群だというので鉄道院からその頃では珍しい感謝状をもらっています。

それまで地図の印刷は石版でやっていたんですね。銅版で彫刻してチャイナーで型をあげ、石版に写して原版を作るのです。またポスターのようなものは原画の上にセルロイドのようなゼラチンを当て、切り針で線が軋して、これに紅がらをつけ、石版石の上に置いて、上からこすってその画像を原画を見ながら、色の配合を頭で考えながら、いちいち手で描き起こすという手間のかかる仕事です。全て手描きでやっていたから1枚のポスターを描き上げるには、数名の版画工がやって3ヵ月くらいかかります。

オフセット印刷の名が広まるにつれて、市田は中西さんと組んで2人で会社をやっていたんですが、オフセット印刷の有望さを知ることにつけて、自分単独で大きなオフセット印刷会社を作ってみようという野心を起こしたんです。幸い、先ほど申しましたように岸本銀行の頭取の息子が金を融資してくれるんで大阪へ帰って梅田の出入橋のところの森川印刷の工場を買って「市田オフセット印刷株式会社」を創設いたしました。東京のポッターのB全自動機を取寄せ、他に新しくオフセットをアメリカに発注しました。

ハリスとポッターの差はどうかと申しますと、ハリスという機械は私も随分使いましたが、フィダーは綿棒みたいのが流れている、その上を紙が走るんです。スピードはポッターより速いですけど、スピードがあるためにごく薄い紙とかボール紙は正確に針に当たらず駄目なんです。ポッターは厚い紙でも薄い紙でも万能で、日本のように紙質が欧米に比べて劣っても万能でオフセットは転写印刷ですから綺麗に刷れるという特長がありまして、市田さんもポッターに惚れ込んだわけです。そして市田さんはアメリカへ新しく注文したポッター2台とハリス1台を大正4年の暮れには、梅田工場へ設置することが出来ました。

“オフセット”と命名

ここでもう一つ、オフセットという名前の中でエピソードがあります。アメリカから日本へ入ってきたとき、英語でオフセットと言うんですが、日本で何と名前をつければよいか問題になりました。オフセットを直訳すれば転写印刷となりますので、そうしようではないかという話もあったんですが、市田さんはハイカラですから、英語のままそのものズバリで“オフセット”で良いではないかと発言して、みなも賛成したということです。市田さんは若いときから宣伝上手で、“英語のまま変わった名の印刷があるではないか”と世



間から注目を受けるようにしたいという狙いだったんでしょう。

市田は大阪で世の中の注目を浴びるような何か、アッと驚かす印刷をやりたいと考えていました。東京ではオフセットでこんな立派な印刷が出来るんだということを、御大典の絵ハガキや、鉄道院の地図で名声を挙げ、大阪では当時華やかなポスターで“オフセット印刷ここに有り”とPRしたかったのでしょう。ところが当時ポスターでは東京の三間印刷には誰もかなわなかったんです。非常に技術の優れた町田という版画工がいて、大変な高級取りでしたが、三越は絶対に三間を信頼して、他のどこにも注文しないのです。

市田さんは三越のポスターを取りたくて、アノ手コノ手を使い、とうとうある日、三越付近で1人は和服、1人は洋服を着た美しいお嬢さんの買物に来る街頭写真をパチリと撮り、それにカラーをつけ、その時商業印刷のプロセス部門を開拓したといわれる多田北鳥というデザイナーにさせるのです。こうして初めて三越からポスターの注文をとることに成功したんです。これは写真に天然色で彩色したもので、非常に好評で有名になりました。これに勢いを得た市田は、大阪商船のポスターの当時人気絶頂の相撲を取り入れました。地球の上に太刀山という横綱が鉄砲をやっている海のポスターで、写真嫌い（写真を撮ると寿命が縮まる）を口説いて巡業先で撮り着色するんです。これがまた非常に好評でアメリカから抗議を申し込まれたぐらいです。というのは地球の上で横綱が足を踏んばっているところが丁度シベリアとアメリカ大陸でありましたから、アメリカ領事館から“アメリカを踏みつけてけしからん”と言ってきたということでしたが、これがまた宣伝となり、いずれにしてもポスターの印刷はオフセットだということになったんです。そして市田オフセットの名が全国で脚光を浴びるに至りました。その後は、酒類、ビール、絹布、外国自動車のポスターで繁盛しました。



(7) 革命的な H・B 写真製版法近代省力化に威力発揮

写真応用平版の発明

オフセット印刷にいつ頃から写真術を応用したかということ、大正5年暮れに九州日報の新年号の付録に天皇陛下の写真を出したいから間に合わせろという注文がきました。これが11月の中旬ですから新年号に間に合わせるには石版刷りの10数色ものを作る期限では出来ない。当時、四六四裁でも大体3カ月はかかってたんですから普通では間に合いません。

それを1ヵ月そこそこでやれということで写真を応用して色つけをするより他に手はない。そこで版画工のナンバーワンであった大沢保正という人が、いろいろ苦勞して、一口で言えば3色原色の手法で作った銅版から、チャイナーで型をとりそれを石版石に貼ってトンボをつけ、捨版を作り、スクリーンを利用、写真分解をしてトンボをつなぎ合わせ手描法で修正する独自の方法です。いわば3色網目凸版法を平版に応用したに過ぎないのですが、平版画としては前代未聞の画期的な途を考案したんです。これが今日では写真応用平版印刷の最初だったということで、幸い製品は間に合い仕上がりが良く、非常な好評を受けたわけです。

H・B法の発掘

こうしているうちに、H・Bプロセス写真製版法を入れるということになってくるんですが、市田さんはオフセットで成功して、これからは印刷の色度を減らして、もっと早く製版を作る方法について関心を持ち、10何色を用いるのと同じ印刷効果の上がるものはないか、頭で考えていました。九州日報で成功したものの窮余の一策で本格的なものがないかと研究している折も折、市岡岱という社員（後に戦後、進駐軍の日吉にあった極東軍工場の工場長）がアメリカへ渡り平版の製版を勉強してきたいという希望を入れ、農商務省の海外特別研修生という免許をとらせ、大正5年10月にアメリカへ派遣したんです。

そこで市田さんとの約束で、逐次アメリカの印刷事情を報告してきた中で、かねて市田が切望している製版法そのものズバリのものが判ったんです。それはH・Bプロセスという製版法で独乙系米人のヒューブナーとオーストリア系米人のブルスタインの2人が共同で発明した金属製コンポーザーによる直焼方式で刷版のケントーは正確で耐刷力数万通し、人工を加えぬ網版はシャープということでした。大体3原色と墨色の4色で原画通りになるが、補色を入れて6色か7色使えば完全だという革命的な製版技術でありました。それからしばしば市岡さんと手紙を往復しながら調べたところによると、このH・Bプロセスは特許であって、その頃の金で30万円、今の貨幣価値では何億ではきかない代物でしょうか。そこで市田さんは、いつもいつも岸本というわけにはいかないし、莫大な金策にハタと困ってしまい、いろいろ苦慮した揚句書生時代に覚えたカルテルとかシンジケートを思い出したのです。シンジケートでH・Bプロセスを日本に導入しようと呼びかけたのが、凸版印刷と東京印刷と小島印刷と秀英社（今の大日本）と精美堂（今の共同印刷）の6社で、H・B特許株式会社というものを作りました。本社は大阪の市田オフセットに置き、東京は凸版に支社を置きました。



H・B法を導入

そしていよいよ大正9年にH・Bプロセスが日本に入ってくるわけですが、これはまた非常に複雑な機械でしたが、みんな日本人の手でホームラーの翻訳をして組立てたんです。当時私は作業係長をしておりましたが真剣でしたネ。それに機密を守るということで、係員以外は出入り禁止でした。組立てにはカメラや製版の専門の技師があたりましたが、完成までに2、3ヵ月かかりました。コンポーザーは約2メートル平方ぐらいの四角い金属製で千分の何ミリの誤差もないという精密さを持ち4色ですからコロコロサイコロみたいに手動で回し、そこへネガを貼って直に内部からアークで焼付けるわけです。最初はなかなかトンボがうまく合わないで苦労はありましたがこの機械が入ったことで製版作業が一変しました。

今まで石版石へ紅がらで線描きしたものにクレヨンととき墨や網伏せ、ポツを手で克明に描写する旧来の手法から、ネガティブを石版石へ転写して、硝酸液で網点を焼いて薄めたり、クレヨンで描き足す変則的な製版法から従来の画工が、名前もレタッチマンと代りポジティブで修正してネガ取りしたものを、コンポーザーで刷版するまで進歩しました。

伊東亮次先生などの話を聞くと、こういう直焼のプロセスというやり方は当時の日本で学問的には相当研究が進んでいて、日本でもテクニックはわかっていたということですが、ただ実際にポジからネガを取り、ネガをコンポーザーにはめて直焼にするという製版法はH・B特許だけが持つもので金30万円払ってその機械を買わなければ出来なかったんです。

ところが機械の購入についてシンジケートを組み共同出資で各社に1台ずつ購入する建前だったんです。が、残念ながら途中でこわれてしまうんです。市田さんは大正8年8月17日に春洋丸で日本を出発して（出発前はシンジケートは存在）、4月2日にサンフランシスコに上陸、8日にニューヨークに着き、それから直ちにH・Bプロセス会社に行って商談を成立させたのです。ところが、市田さんが出発してから後に、日本のほうで凸版以外の会社がどう考えても、金30万円は高過ぎるという異議が出て買うのは見合わせ、もう少し研究し、あちこちの工場を見学して技術を修得してこいということに変わったとの電報が市田のもとへ届いた。悪い言葉で言えば、技術を盗んでこいというわけだが、それは不可能なことで、最後に残ったのは凸版印刷と市田オフセットの2社だけという非常に残念なことになるわけです。



しかしH・B法は大正9年夏に市田オフセット、また大正10年には凸版印刷下谷工場にその機械が入ったんですが、入って見たら前評判通りの優秀な性能を発揮し、日本の印刷界を驚かしました。私は作業課にいましたが、他社の人には絶対に見せないんです。ところが誰かがいつの間にか情報を流したと見えまして、ついに翌々年にそれに似た簡単な直焼の3方法が現われてきました。それにしても3年間ぐらいいは、H・Bプロセスがポスターなんかのカラーものの印刷物のマーケットを独占したものです。

ということは、大きなポスターの場合、発注者が製版法はH・Bに限るという条件付きで他の製版方法では注文がとれなかったのです。その間に最初の莫大な投資額はある程度償却されたと思います。結局、カラーものは市田と凸版に注文がドッと集ってしばらくは独占的状态が続き、H・Bプロセスは威力を示し、また省力化、近代化をなし遂げる大きな効果を挙げたわけです。

(8) 不況下に激化する不当競争共倒れ防止に合併話も

上海分工場時代

先ほどあの頃の印刷界は景気・不景気の影響に半年くらいのズレがあると申しましたが追々と不況の波が寄せて参りました。大正10年頃、第一次欧州戦争で地中海にドイツの潜水艦がウロウロしているときは英米煙草を始めその他の上海の工場に対するいろいろな資材を送ることが出来なくなったんで、日本から安くて早く何でも間に合うという地の利から印刷物とライスペーパーや竹パイプに至るまでの物資の注文が入って、幾年間も大阪の印刷界は輸出で支えられていました。

大阪の市田オフセットや中国印刷は上海や官口の英米系煙草会社から大量の注文がきていたんです。これが続いている間は好況を維持出来て1割の株式配当を続けていたんですが、そういうウマイ話はいつまでも続くわけではない。そのうちに中国のほうで軍閥による内乱が盛んになり、もともと上海というところは自由港で輸出入とも免税だったんですが、軍閥は金が欲しくて輸入品に税金をかけることを考え、大正10年から実施しました。ただし一次品はかけないということで、印刷物にはかかるわけです。

そこでハタと困り、中国煙草レットルの注文で収益を上げたいが輸入税を払っては儲からないので、上海に分工場を作るといこと

になったんです。揚子江の支流で上海の街の中央を流れる黄浦江の下流、呉淞（ウースン）に近い野樹浦（ヤンジッポ）という所で紡績工場の新しい工場を買いとって印刷工場に模様替えして使いました。私はそこに3年半いました。日本人の工場は技術が良かったものですから非常に好評でして、私が行った頃は中国人の従業員が2百人ぐらい、日本人が10数人ぐらいいました。千名以上もいた大阪本社より多く儲けましたね。見積りは私がやるんですが、大阪では当時B全判でオフセット通し4厘ぐらいが相場でしたが、私は上海で8厘とりました。物価は日本と比べると何でも半値以下のときです。従業員の給料は海外手当がありますから、日本で大体40円から60円という月収の時に上海ではその倍になるんです。若造の私が3百円もらっていました。ところが現地の中国人の従業員で、一人前の腕の者がたった20円、見習い工は月給3円です。そういうふうに安い給料で働かせて…搾取ですよ。われわれは高給をとって、ちょうど戦後の進駐軍と日本人の生活程度ほど違っていましたから、恨みを買うのは当たり前ですよ。私はいろいろと、日中一祖同人の態度で臨み、中国従業員待遇の施策を考え、それで業績が上がる素因になったと思いますね。

こうして大変儲かって、本社が梅田に工場を作ったときの借財も上海工場の儲けで返済に当てていました。大正8年に市田は将来、梅田の工場では間に合わないと思越し、海老江の田んぼだった所を坪50円で2,500坪買い近代的な工場を建てたんです。それが、今も残っている凸版印刷の大阪工場です。現在も戦災を受けず健在で昔を物語っています。大正9年夏、新しい工場へ引越し、そこへまた新しくA倍のオフセット機やB倍判の2色のオフセット機を入れました。しかし、50年前に倍判2色機を入れたのは失敗しました。

市田さんという人はいつも生産性の向上を考え、出来るだけ紙面を大きくしたり、色数を一度に刷れるようにという創意工夫を実行に移していました。自ら図面を引き1度に4色刷りや両面刷りの出来る機械の設計を試みていました。2色倍判はアールスコットというオフで少し安いんですが、この機械は散々でした。なぜかというインキが今のような合成樹脂タイプのように速乾性ではありませんから、インキが重なると乾かないんです。週刊朝日の表紙を作ったらいつまでたっても乾かず、ニス引して納めたんですが、煙草の朝日とか仁丹の袋しか出来ないんです。

こういう市田さんにも失敗談はありました。新工場も出来、仕事も次々と入ってきて好調のようではありますが、不況が浸透してきてまして業界内に不当競争が激しくなってきました。大正10年になっ



て印刷界の不況は一層強く何か手を打たねば共倒れとなる危機が迫ってきました。ご承知かと思いますが、大阪の当時の大手企業では、市田オフセットは新興の雄で、天王寺の日東町にあった日本精版という老舗の雄の2つがありました。日本精版は中田熊次が社長で中田印刷を別に経営しておられました。有名なアルミの直版の大手であったアルモ印刷の中井利正が副社長で平版印刷会社として君臨していました。

合併話、破談に

余談ですが、その会社と市田とは不況対策の協調の話が端緒で合併するんです。その後現場を見て判ったんですが、私が最初に申したアルミの機械にもう一つ別に胴をつけたオフセット機などでやっていたらしいんです。市田のほうはほとんど外国製のオフセット機で比べものにならぬほどでしたが、帳面簿価は相当な時価になっており、そんな不実なところが、市田の気に入らなかった原因の一つなんです…。そういう2つのライバル会社が張り合っていると、お互いに自滅に陥ります。そこで例えば大阪毎日新聞の仕事は日本精版で、朝日新聞は市田にというように競い合わず見積りも話し合いで値段を協定しようという狙いでした。

そこで市田さんが自主的に大手2社のカルテルで急場を凌ぐべく新機軸を打ち出し大阪の印刷業界の安定を計ろうとしました。東京の井上源之丞の妹さんが中田熊次の次男・秀夫さんにお嫁に行っているところから井上さんと中田さんは縁戚関係によって円満にこの話の橋渡しを井上さんに頼んだのです。ところが井上は“有尺竿頭一步を進め、完全合併をしたらどうか”と奨めました。

みなさんご承知のように合併ほど難しいものはないんです。“資本をどうする、株の持分はどうする、人事はどうする”—私はこの時の合併と今次大戦中の国家の要請による企業整備の合同と2度の経験を持ち、大変なことだと思います。社名を一つ決めるにも大変障害があるんです。市田さんが一番腹の立ったのは日本精版との合併で新社名を精版印刷株式会社と決まるまで、いろいろ譲歩の上、オフセットを残し、せめてオフセット精版印刷ではどうかと提案して容れられなかったのです。第一次合併の停滞は新株の配分で、日本精版の株主は1株が2株に、市田側は1株という屈辱的条件にたまりかねて、市田さんはその場で耐えられず多くの株主に申し訳ないと自分の株を投げ出して退場してしまいました。非常に短気で損をしました。私見ですが一挙に合併まで持って行かず、先ず協調でお互い提携して気心がわかってからでも遅くはなかったと思います。



その頃、不況が深刻の度を加えまして、会社、銀行の倒産が増してきました。みなさんから私に“第一次欧州戦争後の大正のインフレ・パニックの不況、あるいは昭和始めの世界大恐慌の時の不況、今の不況と比べてどうか”とよく聞かれることがありますが、スケールが違いますので比較は難しいと思いますが産業によって一概に言えないけれど、まあ今日では銀行が潰れるということはないだけでもましじゃないですか。

その頃、台湾銀行の倒産から始まって地方銀行がバタバタ倒れ、岸本銀行も取りつけ騒ぎがあつて潰れたんです。そういうこともあって市田さんは融資の道が閉鎖されて弱気になり、合併条件では譲歩に譲歩を重ねながら遂に整わず、話は破談になったわけです。中田さんの悪口をあまり言いたくないのでこれ位にしておきますが、企業の合併には中心となる人が人格崇高で公平な人でなければうまく行かないという教訓を得ました。

(9) 関東大震災でうるおう大阪業界 H・B プロセスが活躍

翌日に英和辞典の注文が

市田は合併の話が破談になり失意のうちに再起を期して東京に行くんです。工場再建までの暫くの間、東京高等工芸で原価計算などの講師をしていました。ご承知のように大正の12年9月1日が関東大震災で、その頃私は大阪の事務所の2階の工務部で進行係をやつていまして、不況と夏枯れで、注文が不足し、20台ほどあったオフセット機にかける仕事の予定が立たなかつたくらいで、弱っていた記憶があるんです。困ったなあといっているよきに昼頃窓の外にあるボイラー室の煉瓦の煙突がぐらぐらと大きく揺れて、今にも壊れそうに見えたんです。地震は何度だろうと不安なうちに夕方になって号外が出て、初めて東京は全滅だということを知りました。

その晩、緊急工務会を開いて、こんなに不況なのが、地震で一層深刻になるといふ人がいれば、なかには印刷物はどうしても必需品だから東京方面からドッと大阪へ注文が流れ込んでくるという見方をする人と意見が2つに分かれました。官庁も出版社も潰れたんだから当分駄目だという意見の強い中で、平尾という工場長はキッパリと私に手持ちの仕事を片付けて震災復興の仕事の受け入れ態勢を作っておけ、と命じました。

一番最初、東京から注文にきたのは日本橋本石町の至誠堂という

井上英和辞典や教科書を発行する出版社の若社長で、加島講次という人でした。お昼にぐらぐらときて家が倒れ四方から火の手が上がるのを見て「駄目だ」と直感したそうです。売る本がなくなると、出版社の使命は果たせないと気付き、浴衣がけで中仙道をまっしぐらに汽車を乗りつぎ、2日の夕方には大阪に着いたんです。井上英和中辞典を肩からかけたカバンから出して、「H・B製版なら直ぐ出来るでしょう。すぐやってくれ」と言うのです。5万冊の注文を1ヵ月余りでやってあげました。続いて3千万冊を1年間に刷ったと憶えています。昔、紀ノ国屋文左衛門が江戸の火事で直ぐ紀州へ行って材木を買だめて大分限者になった事に似ています。辞典の儲けで至誠堂は復興しました。その次は半月遅れて三省堂のコンサイスの注文がきたんです。凸版刷りで蒲田の自社工場でやっておられた最中に罹災され、やはりH・Bプロセス・オフセットでインデン紙に印刷したんです。そして三省堂さんのいろんな印刷や主婦の友の表紙などがきました。

ここで、井上源之丞の当時の活躍ぶりを伝えますと、井上さんは自分のところの厩橋も下谷二長町の工場も地震にやられて、江戸川にある紙器の工場しか残っていなかったのに大阪の工場（精版印刷のこと）が健在だから復興の印刷物は何でもやらせますからと、方々を回って大量の仕事を受付けて、大阪へもってきて、郵便切手・海軍の海図・民間の月刊雑誌の婦人界や主婦の友などをやりました。こうした仕事を消化するため多忙をきわめ、二部制を敷き、昼夜兼行でジャンジャンやりました。あと2年間は会社に一銭の利益がなくとも1割5分の配当が出来るぐらい儲けました。われわれ従業員はあまり恩恵を受けませんでしたけれど、こんなことがありました。三省堂さんが来阪されると一流の料亭に招いて、私など若造にも、帰りにお土産をくださるんですが、菓子折を開けると当時月給が100円くらいの頃に、金30円とか50円の紙幣が入っているんですね。大阪で長い間印刷の仕事をやっていて、お客さんからお土産をもらったのは初めてでしたね。工場長に報告すると貰っておけと言われ臨時の小遣い銭が出来ました。そして井上さんは大阪に来られるとわれわれの工務営業部の席までまわってきて、丁寧に頭を下げ、いろいろお世話になりますと挨拶されるので驚きました。私は「商売はこれだな」と思いました。とにかく井上さんは下ツパの人間にも礼儀を守られた偉い人でしたね。

私が印刷界に入ったときはモーターは電気でしたが、終戦間際まで印刷工場は直結モーターでなく、天井のシフトからベルトでプーレーを回してやっていましたが、あれは電力を無駄に用いました。私が子供の頃、まだ小学生の時代は家の前に鍛冶屋がありましたけ

れど、2階で小僧が人力でプーレーを回していました。明治の末頃までは大阪の街灯はガス灯で、小学生のころ家に電灯がつけました。ですから電力になるまで石油やガスエンジンでした。私は写真と電気が印刷界の進歩を与える大きな柱で電力と写真術の発展が基礎だと信じています。今日の電子製版に至るまで電気と写真を最高に利用することが印刷界を今日のように進歩させた原動力になったと思います。コンピューターなどでこれからも進歩発展するでしょう。

それと私が業界に入って、東京で副理事長と広報委員長をやっている時に、印刷界のモラルを上げるために印刷人綱領なんかを作ったんですが、もう一つ私が指導的役割を担ったのは原価計算です。印刷界で欠ける価格意識の高揚ということで自分で原価計算することをカラーでスライドなんか作って、随分方々へPRして歩いたのが、お役に立っていると思いますね。

入営中に学んだ原価計算

このもととはという実はず市田先生から教わったんです。私が1年志願兵で軍隊に入営するときに社長に挨拶に行ったんですが、そのとき「軍隊に行って人殺しだけ習ってきても、社会に復帰した時は何の役にも立たないぞ、自分も1年志願兵で姫路連隊にいる間に英文の原書を2冊翻訳したんだから、お前これをやるから余暇に読め」と餞別代りに渡された本は『印刷の経営と原価計算』という分厚い原書なんです。軍隊というところは、ご承知の通り中隊長から私物の検査を受けねば私物は一切持ち込めず、中隊長から呼び出しがあって「お前は軍隊に来てまで娑婆の勉強をするのか」と言われ、「実は社長から夜などムダ話をしている暇に本でも読んで勉強して来い、自分もそうしたと言われましたので」と説明すると本の片隅に紙を貼って印判を押し許可してくれたんです。

それで私は除隊して帰ってから社長に読んだか問われて読みませんでしたでは済みませんから、暗い電灯の下で戦友が雑談している間に辞書片手に全部ではなかったんですが大分読みました。それが原価計算の基礎を覚えた動機になっています。市田さんは数学に強く、市田オフセットに原価計算係を置いていました。そういうふうにして社員教育をしてくれるんです。これと思う将来、管理職になる者に社長自ら会計学とか財務とか、また新しい事務システムなどを教えてくれました。これはテキストになるといえば英文タイプを自ら打ち数名の社員に配り翌日和訳して持参させ、昼休みに話してくれるのです。

私もこうして勉強させられたんですが、印刷経営というのは原価



計算がしっかりしていないと正確な見積りが出来ず、原価計算を基礎にして、プラスアルファで見積りを作るんです。こうして正確に出来るようになったわけです。私は原価計算をチェックする役目でそのため私の見積りが一番確実性があるということになりました。やはり先輩の安達君が入社前に言ったように高等商業に行くより勉強になりました。高等商業には、後になってやってもらいました。工務部へは朝8時に出勤して4時に終わり、1時間出社を早め、代りに1時間早く退社して天王寺にあった大阪大商へ通ったんですが、昼働いて夜通うのは辛かったですね。遂に最後まで行きませんでした。そうこうしているうちに、関東大震災復興の仕事に忙殺されたり、また上海に行かされてそれっきりになりました。市田さんは、このように部下を愛し、将来の後継者を養成していくということに非常に熱心でした。

(10) 印刷界の先覚者・市田幸四郎氏積極性災し、悲運の道へ

帰らぬ旅路に

市田さんが最後にどうなったのか、と言いますと、町の竹橋の向こう側に現在科学技術館のあるところに兵営があったんですが、市田さんは昭和2年3月7日の夕方、オート三輪車に乗って帰宅の途中でしたが、陸軍の自動車の後を走っていたのが急に曲り、前の自動車が兵営内に入ってしまったので、フト前を見ると下り坂になっている坂の上から大八車が下ってきているのを発見しました。運転手は身を翻えして逃げたのですが、不幸にして市田さんの胸に金輪の檜棒が当たってしまったんです。すぐに築地の吉川病院に連れて行きましたが、肋骨が3枚折れて出血おびただしく重態で手のつけようがなかった。知らせを聞いた井上源之丞が東大の外科の先生をつれて見舞に来たり、浜田初次郎もきたりしましたが、内臓も破れていて医者は駄目だと宣告しました。市田は身体が強硬で精神力だけで2晩3日ベッドにいたんですが、遂に万策尽き帰らぬ旅路につきました。

その最後の苦しい息の下で、安達さんと竹沢さんという側近に、口から血を出しながら言った言葉は「あの運転手が悪いのではない。陸軍の車が悪いんだから解雇しないで永く使ってやってくれ」だったそうで、それほど部下思いの人情深い人でしたから多くの社員から尊敬されていたと思います。ある正月の元日の朝に新年の賀詞交歓日に集まってきた社員に16年来の夢にやり残した仕事がある。お得意との約束が守れず困ったと市田が言ったらそれなら今日これ

からやりましょうと紋付を脱いで印刷機械を回したというエピソードがあります。「市田のためなら水火も辞さぬ」 という部下が大勢おりました。とにかく西郷隆盛に何千人という部下がいて最後までついていったというようなものですね。

市田さんの亡くなったのは42才という若さでしたが、日本の印刷界に功労のあった先覚者が終末は非常に不運で悲劇的な最後で終わりました。佳人薄令と言いますが確か10数年間でやりたいことを為し遂げられたから悔いはなかったかも知れません。

ここで艶話しを一つだけ紹介しますが、神戸の光村利藻という人は晩年遊蕩に巨富の財産を湯水のように使い果たしたという有名な話が残っています。市田さんと比較すると金額では大差がありますが、市田さんの家はクリスチャンで一切酒を飲まない家でしたが、非常に経営が難しくなってくると人間は何か慰安を求めたいわけです。ところが家に帰ってもどうしようもないということで、ついお茶屋酒を憶えたんですね。二号さんに当たるような芸者をつれて上海工場の視察に行ったという話もありますし、神楽坂で下の屋敷がうるさいからといって右の灯籠を上からころがし落として神楽坂署に1晩留置されたというような馬鹿なこともやっているんですね。

また市田さんは男にもそうですが、女にも惚れられました。男は女に惚れるものと相場が決まっていますが、女に惚れられるような人間にはどこか魅力があるんですね。普通芸者なんか金の切れ目が縁の切れ目になるといわれますが、市田さんに世話された女は死ぬまで慕い、死んでからも尽くしたんですね。市田さんが最後のときに安達さんにカナダサン保険に1万円の生命保険をかけてあるから、これは家のものも知らないし、彼女にやって生活費にしろと伝えてくれと言ったんです。当時、1万円では一生食えましたからね。そしてその通りに安達さんはしたんですが、彼女は葬儀の日に白装束で市田さんの写真の前で短刀で首を突き後を追って死んだんですね。

“前へ前へ”の人

市田さんは東洋一の総合印刷工場を東京と上海に作るという構想をたて、政友会の森格という実力者と話を進めているうちに亡くなりましたが、本当に残念でした。長生きしていたら日本の印刷界ももっと早く近代化していたでしょう。

私が軍隊に行っているとき、普通なら休職ですが月給の半分をくれまして、また、3月31日に明日除隊するからよろしくと挨拶に行ったら、軍隊で規則正しい生活をしてきたんだから少し骨休めし



て余り長く休まないで入社するように言われたので、ヨシとばかり私は4月1日から背広を着て入社しましたら入隊前の紙の倉庫の仕事をやめて自分の側にきて仕事を手伝えと命ぜられました。社長秘書の役です。このことが将来非常に役に立ったと思います。その年の12月に体重を計ると8ヵ月間で3貫余減っていました。今ならどこか身体が悪くはないかと精密検査をするところですが、なにしろ士官候補生時代のような陽気な生活とガラリと環境が変わり、厳しい市田社長の傍で手紙を書かされたり計算業務をしたりでやせた原因が判っているのでアワテませんでした。

市田さんは名将であったが、前へ進むことを知って「2歩前進1歩後退」という戦術戦略に欠けた大将でした。側近にサイフを握るような人がいて苦言を呈するようにして引締めていけばよかったので、調子のいいときに手を広げ過ぎる感がありました。そういう意味で人間的には非常に立派な人でしたが、混戦時の名将とはいえなかったと思います。

「前車の覆るを見て後車の戒とする」という諺がありますが、市田は新しいことをどんどん取り入れ人材を高給で雇い高等商業で財政学を学びながら積極性が災いして不況に備える心構えが無かったと後生の人から批判を受けるのも止むを得ないと思います。わが国の平版印刷界に前人未踏の金字塔を建てた偉人がなぜ栄光の座から悲劇への道を通ったか、大不況という外因ばかりではなかったのではないですか。

時間の関係で昭和初期の世界恐慌の中で印刷界はどうやって不況を切り抜けたか、また戦時中の企業装備の話もしたかったんですが尻切れトンボで終わりました。また機会があれば続きを申し上げてご参考になれば、と思います。昭和15年頃、軍の方針は大日本、凸版、共同印刷を1本に合併させようという話もありました。昭和10年に秀美社と日清印刷が合併し大日本印刷が出来たし、昭和19年に私の経営していた愛宕印刷や川口印刷社らと帝国印刷を作った話、戦争が激しくなって印刷文化協会が出来て当時若手の三羽鳥と称せられた佐久間長吉郎、山田三郎太、大橋松雄の活躍や企業整備の話などいろいろありますが、今回はこのへんで終わりに致します。

